

東南アジア史学会会報 № 6

昭和 43 年 3 月 30 日

委 員 会 報 告

本年度第一回会合を昭和 42 年 12 月 15 日に開き本年度委員の職務分担等を決定した。

庶務・会計 和田久徳 近森正 池端雪浦 森弘之

涉外担当 白鳥芳郎 量博満

会報編集 市川健二郎 内田晶子

なお昭和 43 年 4 月以降の研究会は毎月 1 回とし第 3 金曜日午後 5 時から開くこととした。

第二回会合を昭和 43 年 2 月 24 日に開き 4 月以降の研究会、夏季研究大会などについて相談した。(別項参照)

研 究 会 報 告

1 月 26 日東京大学図書館で近森正氏のクメール考古学の現状についての現地調査報告があつた。

2 月 9 日同上所で白鳥芳郎氏の北部タイ・ラオス見聞と題する報告があつた。同氏は去年 12 月の沖縄調査に続き、同月より本年 1 月までタイとラオスを旅行され山間部族の調査を行つた。

研究発表要旨

近森正

Ⓐ [カンボジアにおける考古学活動の現状]

1965 年 8 月から昨年 8 月まで 2 年間のカンボジア滞在中、B. P. GROSPLIER 氏や M. GITEAU 女史の好意でみることのできた考古学研究の状況。(1) 1951 年以降、カンボジア王国独立後のフランス極東学院とカンボジア政府との関係 (2) カンボジアにおける博物館、その収蔵状況 (3) カンボジア王国芸術大学 (4) アンコール遺蹟保存局の活動 (5) アンコール・バプオンの修復作業の進行 (6) バクセイ・チャムクロンの修復作業 (7) プラサット・クラヴァンの修復作業における煉瓦積み建築復元技法の開発 (8) ロルオス・ロレイの破損状況 (9) アンコール・トム王宮址の発掘 (10) サンボール・プレイックの発掘と成果 (11) ミモットにおける新石器時代遺蹟

の発見と調査 (12) サムロン・セン貝塚の現状。

③ [サムロン・セン貝塚の踏査]

1967年4月、減水期のトンレ・サップ河の一支流、ストゥン・チニット川を遡行して、サムロン・セン貝塚の調査を行ない、資料を得ることができた。(1) 遺蹟の現状 (2) 地形 (3) 貝層の状態 (4) 自然遺物 (5) 人工遺物 (6) 先史環境の復元 (7) 研究的整理と研究の傾向 (8) 青銅器の出土について (9) 土器の分類及びコンプレックス (10) サムロン・セン出土土器と Sa-huynh-Kala Kalanay 土器複合との関係 (11) オケオ及びドンソン遺蹟出土土器との比較 (12) サムロン・セン貝塚採集のシャコガイ製抉状耳飾とザルガイ科シラナミ製のペンダント (13) ドンソン青銅器文化との関係 (14) サムロン・セン貝塚の文化ステージ。

④ [カンボジアのドンソン文化の性格について]

プノンペン国立博物館所蔵のドンソン資料を M.GITEAU 女史の助力によって観察、記録することができた。(1) 銅鼓、銅壺のディスクリプション (2) 銅鼓、銅壺、銅鐘にみられるカンボジア・ドンソン文化の編年的、空間的ずれ (3) 南ドンソン文化の概念 (4) 編年上の位置づけ。

新刊書紹介

Harry J.Benda & John A.Larkin, The World
of Southeast Asia : Selected Historical Readings
Harper & Row, Publishers, 49 East 33rd Street
New York. 1967. 317 pp., with
suggested readings and index. \$ 4.50 : paper back.

市 川 健二郎

英文で記された東南アジア史の総合資料選集。6章に分類した 80 資料を平均 4 頁ずつ収録しているが容易に引用できる周知の資料は除くとただし書きしてある。第 1 章には外国人旅行者が観察した原地人社会についての次の 7 史料がある。1. 晋の法顯の仏國記、東南アジアの項 (Li Yung-hsi 訳本), 2. 唐の義淨の南海寄帰内法伝、スマトラの条 (高楠順次郎訳本), 3. 宋の趙汝适の諸蕃志、フィリピンの条 (Hirth & Rockhill 訳本), 4. 元代のマルコポーロ旅行記, Chamba, Java, Ferlec, Basma の条 (H. Yule 訳本), 5. 明の費信の星槎勝覽と馬歛の瀛涯勝覽、マラッカの条 (P. Wheatley 訳本), 6. Tomé Pires の Suma Oriental, タイ, イン

の発見と調査 (12) サムロン・セン貝塚の現状。

③ [サムロン・セン貝塚の踏査]

1967年4月、減水期のトンレ・サップ河の一支流、ストゥン・チニット川を遡行して、サムロン・セン貝塚の調査を行ない、資料を得ることができた。(1) 遺蹟の現状 (2) 地形 (3) 貝層の状態 (4) 自然遺物 (5) 人工遺物 (6) 先史環境の復元 (7) 研究的整理と研究の傾向 (8) 青銅器の出土について (9) 土器の分類及びコンプレックス (10) サムロン・セン出土土器と Sa-huynh-Kala Kalanay 土器複合との関係 (11) オケオ及びドンソン遺蹟出土土器との比較 (12) サムロン・セン貝塚採集のシャコガイ製抉状耳飾とザルガイ科シラナミ製のペンダント (13) ドンソン青銅器文化との関係 (14) サムロン・セン貝塚の文化ステージ。

④ [カンボジアのドンソン文化の性格について]

プノンペン国立博物館所蔵のドンソン資料を M.GITEAU 女史の助力によって観察、記録することができた。(1) 銅鼓、銅壺のディスクリプション (2) 銅鼓、銅壺、銅鐘にみられるカンボジア・ドンソン文化の編年的、空間的ずれ (3) 南ドンソン文化の概念 (4) 編年上の位置づけ。

新刊書紹介

Harry J.Benda & John A.Larkin, The World
of Southeast Asia : Selected Historical Readings
Harper & Row, Publishers, 49 East 33rd Street
New York. 1967. 317 pp., with
suggested readings and index. \$ 4.50 : paper back.

市 川 健二郎

英文で記された東南アジア史の総合資料選集。6章に分類した 80 資料を平均 4 頁ずつ収録しているが容易に引用できる周知の資料は除くとただし書きしてある。第 1 章には外国人旅行者が観察した原地人社会についての次の 7 史料がある。1. 晋の法顯の仏國記、東南アジアの項 (Li Yung-hsi 訳本), 2. 唐の義淨の南海寄帰内法伝、スマトラの条 (高楠順次郎訳本), 3. 宋の趙汝适の諸蕃志、フィリピンの条 (Hirth & Rockhill 訳本), 4. 元代のマルコポーロ旅行記, Chamba, Java, Ferlec, Basma の条 (H. Yule 訳本), 5. 明の費信の星槎勝覽と馬歛の瀛涯勝覽、マラッカの条 (P. Wheatley 訳本), 6. Tomé Pires の Suma Oriental, タイ, イン

ドシナ、フィリピンの条 (A. Cortesão 訳本), 7. マゼラン周航に参加した Antonio Pigafetta のミンダナオ、ビサヤ諸島記事 (J. A. Robertson 訳本)。

第2章には 11 の現地人史料がある。 8. クメール碑文, Suryavarman I への忠誠の誓文 (L.P. Briggs 訳本), 9. ビルマの Shwegugyi パコダ碑文, 南方上座部仏教のパガン王権の項 (G.H. Luce 訳), 10. ジャワの Pararaton, 戦いの説話 (J.L.A.B. Randes 蘭訳本より訳), 11. タイのラーム・カムヘン王碑文 (G. Coedes 仏訳本より訳), 12. インドネシアのナーガラ・クルタガマ, マジャパイト王朝説話 (蘭訳・英訳諸本より A.A. Teeuw 意訳), 13. 黎朝の安南史略, 元と安南との交渉 (漢籍, 越南訳本より T.B. Lam 訳), 14. マライのスジャラ・マラユ, マラッカ宮廷生活の条 (C.C. Brown 訳), 15. ジャワの Babad Tanah Djawi, 回教史と対蘭闘争記事 (I.J. Meinsma 蘭訳本より訳), 16. スマトラの Hikayat Aceh, 王権を物語る条 (T. Iskandar 蘭訳本より訳), 17. ビルマの貝葉土地台帳資料, ペグー地方の町の記事 (J.S. Furnivall 訳本), 18. ビルマの Glass Palace 年代記, 宮廷生活を示す条 (Tin & Luce 訳本)。

第3章には主として西欧人の観察した 20 の史料 (16 — 20世紀) がある。 16世紀の 2 史料は 19. 1511年マラッカ攻略の時のアルブケルケ記事 (W. de Gray Birch 訳本), 20. 西ジャワのバンタムに関する Cornelis van Houtman の記事 (W. Lodewijcksz 蘭語本より訳), 17世紀の 6 史料は 21. ルイ 14世とトンキン王間の 1681 年往復書簡 (G. Taboulet 仏語本より訳) 22. ジャワ蘭人官吏の本国宛 1621 年報告書 (W.P. Coolhaas 蘭語本より訳), 23. フィリピンのミンダナオ島でのカトリック布教関係記事 (Blair & Robertson 英訳), 24. タイのアユタヤに関するオランダ東インド会社員の 1636 年記録 (F. Caron & J. Schouten 英訳), 25. タイ貿易に関する在バタビア東インド会社員の本社宛 1655 年書簡 (タイ国立図書館資料), 26. マタラム宮廷に関する 1648 年の Rijklof van Goens らの 2 記事 (H.J. De Graaf 蘭語本より訳)。

18世紀の 2 史料は 27. フィリピン統治に関する D.J.B. Vargas の 1784 年布告 (E. Blair & J. A. Robertson 英訳), 28. ベトナムの嘉隆帝に関する 1792 — 93 年の J. Barrow 記事 (J. Barrow 英文)。 19世紀の 7 史料は 29. ビルマのアヴァ王朝から Wellsley 卿宛 1802 年の書簡 (M. Symes 英文), 30. マライのケダー・サルタンの息子から Minto 卿宛の 1810 年書簡 (F. Swettenham 英文), 31. タイとコーチシナ関係の J. Crawfurd 記事 (J. Crawfurd 英文), 32. タイのモンクット王についての A. Leonowens 記事 (A. Leonowens 英文), 33. 蘭印の栽培制度に関する Max Havelaar 記事 (E.D. Dekker 蘭語本より訳), 34. コーチシナ関係の Francis Garnier の 1864 — 65 年の 2 記事 (G. Taboulet 仏語本より訳), 35. マライ土侯会議関係記

事 (F. Swettenham, 1897 年報告書)。20 世紀の 3 史料は 36. 西ジャワのバンタム事件調査委員会 1927 年報告書 (H. J. Benda & R. T. Mc Vey 訳本), 37. インドシナ総督 P. Pasquier の 1930 年の演説 (仏語資料より訳), 38. ビルマの C. Innes 卿の 1931 年の演説 (植民地資料 1930 年度版, 英文)。

第 4 章には現地人, 華僑, 印僑の側面からみた 18 史料がある。まず現地人の一般的な行動型を示す 2 例は 39. あるマラヤ回教徒少年 Abdullah の記録 (A. H. Hill 英訳), 40. ベトナム対カンボジア関係の Phang-Thang-Giang の記事 (Gia-Dinh-Thung-Chi の仏語版より訳)。農村社会の声を反映する 4 史料は 41. ジャワ人の救世主を望む声 (G. W. J. Drewes 蘭語本より訳), 42. ディポネゴロのジャワ戦争の年代記 (P. J. F. Louw 蘭語本より訳), 43. あるビルマ人の 1935-36 年の反植民地運動記事 (Cha Ne Cho-Ma Ma Lay 英文), 44. フィリピンの Sakdal 運動で逮捕された数人との 1935 年の会見記 (D. R. Sturtevant 英文)。

都市の指導層の声を反映する 8 史料は 45. タイのチュラロンコーン王の奴隸解放令と教育令 (Prachoom Chomchai 英文), 46. フィリピンのホセ・リサールの著書から (J. Rizal, Noli Me Tangere より訳), 47. ベトナムの Pham Quynh より P. Raymond 植民相宛の 1931 年書簡 (Pham Quynh 仏語本より訳), 48. ベトナムの Nguyen-Thai-Hoc より仏国議会宛の 1930 年書簡 (Nhuong-Tong 仏語本より訳), 49. タイ国王と革命党との 1932 年往復書簡と 1935 年の国王退位宣言 (K. P. Landon 英文), 50. スカルノの 1930 年の談話 (同氏, 蘭語資料より訳), 51. インドネシアの Sutan Sjahrir の 1935 年記事 (S. Sjahrir & C. Wolf 英文), 52. フィリピンのケソン大統領の 1939 年演説 (英文)。

少数民族関係の 4 史料は 53. ビルマ円卓会議 (1931 年)での N. M. Ca wasjee の印僑に関する発言 (英文議事録), 54. ビルマ円卓会議 (1931-32 年)でのカレン族代表の発言 (英文議事録), 55. タイのラーマ 6 世の 1914 年の華僑批判の著書 (K. P. Landon 英文), 56. フィリピン紙上 (1962 年)の T. M. Locsin の華僑関係記事 (S. S. C. Liao 英文)。

第 5 章には戦中戦後の独立運動関係の 15 史料を載せている。戦中の 5 史料は 57. 日本軍シンガポール軍政総監の文書 (H. J. Benda, 岸幸一, 他編・英文), 58. ジャワ人のみた日本軍政 (L. H. Palmier 英訳本), 59. 1943 年のビルマ独立関係の東条英機, ウ・バ・モウ文書 (Yale 大学蔵未発表英文資料), 60. フィリピンのラウレル大統領就任演説と T. Confesor の書簡 (T. A. Agoncillo 英文), 61. 仏印総督 J. Decouex の戦中の記録 (N. W. Broekhuysen 英訳)。

戦後の 10 史料は 62. スカルノの 1945 年と 1949 年の演説（英文公文書），63. インドネシア回教徒 Muhammad Isa Anshari の 1957 年演説（S. Sastrowardjojo 英訳），64. インドネシア共産党指導者アイジットの論文（U. S. Joint Publication 英文資料），65. フィリピンのマグサイサイ大統領の 1955 年演説（英文），66. フィリピン共産党 L. Taruc の自叙伝（英文）67. ベトナム人民共和国の 1945 年独立宣言文（H. R. Isaacs 英文），68. ジュネーブ会議での 1954 年のホー・チ・ミン演説（英文議事録），69. ビルマのオン・サンの 1947 年の演説（Maung Maung 英語版），70. マラヤのラーマン首相の 1957 年演説（英文公文書），71. タイのタノム首相の 1964 年演説（SEATO 記録）。

第 6 章の 9 資料は現代の農村社会に残る伝統的構造に関する社会学・人類学調査報告資料である。72. タイの都市と農村（Anuman Rajadon 英文），73. シンガポールのマライ人の生活型（J. Djamour 英文），74. 南ベトナムの村落（G. C. Hickey 英文），75. マラヤの複合社会と漁村経済（R. Firth 英文），76. ラオスの農耕儀礼（J. M. Halpern 英文），77. 中部ジャワの宗教生活（C. Geertz 英文），78. ビルマの山地部と平野部の社会（E. R. Leach 英文），79. ミンダナオ島の Hanunoo 族社会（H. C. Conklin 英文），80. スンバワの村落（P. R. Goethals 英文），

なお本書の書評には市川健二郎、「ベンダ、ラーキン共編、東南アジア史資料撰集」，東洋学報，第 50 卷 4 号（昭和 43 年 3 月）がある。また近刊書として H. J. Benda and J. Bastin, Modern Southeast Asian History: An Interpretative Essay (Englewood Cliffs, 1967) の名を参考までにお伝えする。

国 内 研 究 情 報 I 市 川 記

海外研究情報の他に国内研究情報も伝えてほしいとの要望があり、また今月はちょうど学年末に当るので過去一年間の国内情報の若干を部分的にお伝えしたい。ただし史学雑誌の学界回顧と展望欄の内容と重複しないように配慮して記事を選んだ。

東洋学インフォメーション・センター（東洋文庫内）が 1967 年 7 月出版した「特殊文庫所蔵マイクロフィルム連合目録（273 頁，1400 円）の中に安南本 42 部のフィルム目録がある。また同所で 6 月出版した「諸外国におけるアジア諸言語の教授，1960-1961 年度」（415 頁，

戦後の 10 史料は 62. スカルノの 1945 年と 1949 年の演説（英文公文書），63. インドネシア回教徒 Muhammad Isa Anshari の 1957 年演説（S. Sastrowardjojo 英訳），64. インドネシア共産党指導者アイジットの論文（U. S. Joint Publication 英文資料），65. フィリピンのマグサイサイ大統領の 1955 年演説（英文），66. フィリピン共産党 L. Taruc の自叙伝（英文）67. ベトナム人民共和国の 1945 年独立宣言文（H. R. Isaacs 英文），68. ジュネーブ会議での 1954 年のホー・チ・ミン演説（英文議事録），69. ビルマのオン・サンの 1947 年の演説（Maung Maung 英語版），70. マラヤのラーマン首相の 1957 年演説（英文公文書），71. タイのタノム首相の 1964 年演説（SEATO 記録）。

第 6 章の 9 資料は現代の農村社会に残る伝統的構造に関する社会学・人類学調査報告資料である。72. タイの都市と農村（Anuman Rajadon 英文），73. シンガポールのマライ人の生活型（J. Djamour 英文），74. 南ベトナムの村落（G. C. Hickey 英文），75. マラヤの複合社会と漁村経済（R. Firth 英文），76. ラオスの農耕儀礼（J. M. Halpern 英文），77. 中部ジャワの宗教生活（C. Geertz 英文），78. ビルマの山地部と平野部の社会（E. R. Leach 英文），79. ミンダナオ島の Hanunoo 族社会（H. C. Conklin 英文），80. スンバワの村落（P. R. Goethals 英文），

なお本書の書評には市川健二郎、「ベンダ、ラーキン共編、東南アジア史資料撰集」，東洋学報，第 50 卷 4 号（昭和 43 年 3 月）がある。また近刊書として H. J. Benda and J. Bastin, Modern Southeast Asian History: An Interpretative Essay (Englewood Cliffs, 1967) の名を参考までにお伝えする。

国 内 研 究 情 報 I 市 川 記

海外研究情報の他に国内研究情報も伝えてほしいとの要望があり、また今月はちょうど学年末に当るので過去一年間の国内情報の若干を部分的にお伝えしたい。ただし史学雑誌の学界回顧と展望欄の内容と重複しないように配慮して記事を選んだ。

東洋学インフォメーション・センター（東洋文庫内）が 1967 年 7 月出版した「特殊文庫所蔵マイクロフィルム連合目録（273 頁，1400 円）の中に安南本 42 部のフィルム目録がある。また同所で 6 月出版した「諸外国におけるアジア諸言語の教授，1960-1961 年度」（415 頁，

1000円)の中に東南アジア諸言語の項目がある。

ユネスコ東アジア文化研究センター(東洋文庫内)は社会成層と階層移動に関する国際協力調査のひとつとして1966-67年度にタイ国へ調査団(団長東京大学富永健一助教授)を派遣し調査を行い現在調査資料の編集をおこなっている。また1967年度から始まった「東アジア諸国における人権思想の発達」というプロジェクトの中には東南アジア諸国家における西洋人権思想の摂取過程の研究がふくまれている。同センターの季刊紙 *East Asian Cultural Studies*, Vol. 6 (1967年3月)には東アジア諸国における西洋文明受容に関する国際シンポジウム(1966年、東京)の議事録が載っている。東南アジア関係の論文は J. S. Sidhu (ビルマ, pp. 41-54), 曹永和 (台湾, pp. 55-72), 蘇宗仁 (香港, pp. 73-81), K. G. Tregonning (マライシア, pp. 164-175), Domingo Abella (フィリピン, pp. 176-189), Titima Phitakspraiwan (タイ, pp. 190-200), Nguyen Khac-Kham (ベトナム, pp. 201-228), Sutjipto Wirjosuparto (インドネシア, pp. 82-109)。

同センターの他の出版物の中には文献抄録 A Survey of Bibliographies in Western Languages Concerning East and Southeast Asian Studies (1967, 227 pp.)があり、またChadin Flood がタイ語原本から訳した Cawphraja Thiphakorawon, The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, the Fourth Reign がある。その第3巻はテーマ4世年代記の注釈部分であり、続く第4巻には付録、補遺、参考文献、索引が載る予定。研究叢書シリーズ No. 10 として出版された Nguyen Khac-Kham, An Introduction to Vietnamese Culture, 140 PP. はベトナム文化史の入門書として手頃な本であり、先史時代から現代までのインド文化、中国文化、西欧文化の受容過程を手際よくまとめたもの。

東洋文庫欧文雑誌目録(英文, 1967年, 135 pp.)はモリソン文庫本をふくむすべての所蔵洋雑誌の巻号を点検した目録。同文庫研究部の Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 25, 1967 の中に K. Enoki, Dr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko があり、ロンドン・タイムズのバンコック特派員時代のモリソン氏蒐集資料については市川健二郎「モリソン文庫蔵東南アジア史料の重要性」、東洋学報、第50巻2号(1967年9月), pp. 116-131がある。

東京外国语大学アジアアフリカ言語文化研究所は文化双書 No. 1 としてアヌマン・ラーチャトン著、河部利夫訳註、タイ農民生活、1967年、135 pp. を出版した(石井米雄氏の書評、東南アジア研究5巻2号、1967年9月、pp. 426-427 参照)。同研究所研究会発表の中に河部

利夫「地域研究とは何か」があり、同所発行の通信第3号、1967年11月に永積昭「インドネシア語研修の思い出」がある。

京都大学東南アジア研究センター出版の諸論文については史学雑誌の紹介にゆづるが、同センター研究会の諸発表の中に Soemantri Brodjonegoro 「インドネシアにおける研究について」、石井米雄「インドネシアにおける現地調査について」、三谷恭之「北部タイにおけるモン・クメール系言語」、J. S. G. Wilson、「東南アジアの経済」、坂本恭章「カンボジア留学から帰って」、水野浩一「東北タイ農村の経済活動」がある。

アジア経済研究所の英文季刊紙 The Developing Economies の第5巻3号(1967年9月)の中に M. Kuchiba and Y. Tsubouchi "Paddy Farming and Social Structure in a Malay Village" および S. Kawano, "The Political Setting of Rapid Economic Growth in Taiwan" がある。同所の月刊紙「アジア経済」1967年11月号には高橋保「カンボジアにおける農業水利事業の歴史的展開」がある。

九州大学教育学部比較教育文化研究施設は紀要17号(1967)に吉田禎吾「東南アジアにおける親族組織と価値体系」、綾部恒雄「旧制度下タイの身分制度と人間形成」を載せている。綾部氏は「タイ国社会における性と年令の原理」、九州大学教育学部紀要、第12集(1967年3月)と「タイの穀母神とその儀礼」、新喜の研究、第3巻(1967年6月)を併せ発表している。

東京大学東洋文化研究所の紀要第42冊には築島謙三「マレー人は怠惰であるということについて」があり、同所発行の「東洋文化」第43号には岸幸一「ジャワの村落組織について：デッサとカルラハンについて」がある。

その他の個人研究の中に太田常蔵「ビルマにおける日本軍政史の研究」吉川弘文館、1967年8月、586 pp.、お茶の水女子大学人文科学紀要第20巻(1967年3月)の和田久徳「十五世紀初期スマトラにおける華僑社会」および和田久徳、白石晶子「鄭良弼本(横山重氏蔵)歴代宝案内容目録」、民族学研究第31巻4号(1967年3月)の市川健二郎「タイ華僑の同化過程」、同32巻3号(1967年12月)の市川健二郎「華僑と中国本土」、同号の大林太良「東南アジアにおける米の骨モチーフについて」があり、また藤沢義美「南詔国家の構成と白蛮文化」、歴史教育第15巻5・6合併号、河原正博「宋代の殺人祭鬼について」、法政史学第19号(1967年1月)、大林太良「インドシナにおける製塩の民族史的意義」、一橋論叢第58巻1号、藤原利一郎「黎末史の一考察」、東洋史研究第26巻1号、永積昭「ブディ・ウトモ成立と発展——ジャ

ワの民族的自覚の源流」、史学雑誌第76巻2号、3号があるが、これらの内容紹介については史学雑誌の回顧と展望欄にゆする。お茶の水史学、第10号(1967年)には高崎美佐子「十八世紀における清タイ交渉史」がある。上智史学、No.12(1967)に白鳥芳郎「華南土着住民の種族=民族分類とその史的背景」がある。

学会研究大会については史学会、東南アジア史学会の他に民族学会大会(1967年5月)があり、その研究発表の中には小川博「崑崙奴考」、W. H. Newell「一夫多妻社会における離婚と結婚——マライシアを例として」、市川健二郎「華僑の親族構造」、大林太良「中国南部少数民族の成年式と勲功祭宴」がある。また特定研究日本近代化の研究合同研究会(1967年12月 東大)ではアジア諸国と日本との近代化の構造的相互関係を担当する研究班の研究発表として市川健二郎「タイ国社会の比較近代化——チュラロンコーン王と明治天皇との時代」があった。

総合研究「東南アジアにおける権力構造の変遷」(研究代表者、山本達郎)は第3年度の仕事として華南、ベトナム、カンボジア、タイ、ビルマ、マライシア、インドネシア各地域の分担調査者がそれぞれ報告書を執筆中である。

日本タイ協会(会長、佐藤喜一郎三井銀行会長)は1967年4月から東京駅に近い三井2号館へ移転しタイ語新聞の邦訳ダイジェスト版「タイ国情報」を復刊し第1巻4号まで発行した。

またバンコック在留日本人会の会報(月刊)がバンコックで発行されている。邦人社会の生活を知るに役立つ資料である。

お 知 ら せ

○ 夏季研究大会予定

日 時 7月上旬頃

場 所 東京外語大学アジアアフリカ言語文化研究所

研究発表を御希望の方は5月15日(水)まで、係へお申し込み下さい。

○ 本年度春季研究会予定

4月19日(金) 土屋 健治氏: インドネシアにおける民族独立思想の形成

5月17日(金) 川本邦衛氏: 「伝奇漫録」について

6月21日(金) 白鳥 芳郎氏: 東南アジア研究における歴史学と民族学

いずれも午後 5 時から、場所は追って御通知申し上げます。

○ 東南アジア史学会振替口座番号は

東京 59721 です。 (会費 年額千円)